

## A01 「原典」

### A01 原本『老子』の形成と林希逸『三子齋口義』に関する研究

研究代表者 池田 知久  
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究分担者 関口 順  
埼玉大学教養部 教授

(1) 本研究課題に関して、年間合計18回、平均月に1.5回、大小の研究会議を開いた。会議では、研究代表者の主宰の下、代表者・分担者と協力者が新出の資料である郭店楚簡『老子』、それに対抗した郭店楚簡の儒家系の資料(『緇衣』『窮達以時』『唐虞之道』など)、および林希逸『三子齋口義』について最新の研究を報告し、それに基づいて参加者が全員で討論を行った。協力者には、彭浩、王震中、ホアン・パウロス、ルドルフ・ワグナー、大川俊隆、大野出、等々、内外の著名な学者を多数迎えて専門的知識を提供してもらった。研究成果の一端は、代表者著『郭店楚簡老子研究』(1999年11月、東京大学中国思想文化学研究室)・代表者監修『郭店楚簡の思想史的研究』第3巻(2000年1月、東京大学中国思想文化学研究室)にまとめて刊行した。

(2) 高性能ノート型パソコン1台を購入し、これを利用して『老子』を始めとする新出資料のデータベースを作成した。その入力には、基本的に代表者・分担者・協力者の無償奉仕であるが、一部分、学生アルバイトを委嘱した。また、専門書店より出版された新出資料のCD-ROMを購入して、研究の便を図った。以上は、本研究課題の今後の展開の基礎をなす作業である。

(3) 林希逸『三子齋口義』の内外における版本を調査するために、代表者と協力者は調査旅行を国内3回と海外1回(台湾、代表者の私費)を行った。調査した版本の一部分は、マイクロフィッシュ化およびゼロックスコピー化したが、デジタル撮影は版本の所有者の拒否に会ったため進捗しなかった。なお、この方面の研究成果の一端は、代表者監修『郭店楚簡の思想史的研究』第3巻(前掲)にまとめて刊行した。

(4) 代表者と分担者は、個別に合計3回、延べ27日間、海外への調査・研究旅行を行った(その内1回は代表者の私費)。目的地は中国の北京市・山東省曲阜市(以上、

国際儒学連合会)・湖北省武漢市(武漢大学)、台湾の台北市(中央研究院)・新竹市(清華大学)であり、本研究課題に関して、講演・座談会を行い(延べ4回)、国際会議に参加し(延べ3回、1回は議長として)、海外の学者(数十名)と意見交換し、版本調査(1回)・資料搜集(4回)を行った

### A01 原本『老子』の形成と林希逸『三子齋口義』に関する研究

研究分担者 関口 順  
埼玉大学教養部 教授

私は原典班の池田知久先生を代表者とする「原本『老子』…」の研究分担者、関口順です。以下、報告をお送りします。

研究代表者である池田知久が行った原本『老子』形成の研究と平行して、『老子』の道の哲学が他の思想諸派に与えた影響、および他の思想諸派側からの道の哲学受容の問題を、主として儒者の思想を基軸に考察した。『老子』形成の考察には思想史的な観点も必須だからである。今年度は、一つ目は「儒学の国教化」という従来から存在する論争点に即して考察をすすめる、平成11年9月に内部の研究會においてその結果を口頭発表した。「儒学の国教化」問題は、道の哲学を受容した結果生じた「天」「天道」「天下」等の観念を正しく認識し、それらの観念の基礎の上で考察されるべきであり、従来の「国教化」論争は根底から考え直す必要があることを主張した。二つ目は『漢書』芸文志・六芸略を構成の角度から分析し、そこで占めている道の哲学の作用の重要性について考察した。『漢書』芸文志は、これまで目録学[中国伝統の図書学]の重要文献として研究されており、このように思想的・文化史的な文脈において考察されることはなかった。今回あらためて、「古代の文化史的な歴史意識の形成に対して道の哲学が果たした働き」という文脈から考察したわけである。その一端は平成11年12月に台湾の中央研究院中国文哲研究所で報告し、同所研究員と討論した。

---

## A01 チベット大蔵経とチベット蔵外文献研究

研究代表者 御牧 克己  
京都大学京都大学文学研究科 教授

本研究は、チベット学に於ける古典学の再構築を目指し、チベット大蔵経とチベット蔵外文献との各々について、以下の二点より研究を遂行することを目的とする。

1. 従来明らかになっている主要文献の整理。(即ち、目録、解題、批判的校訂本、翻訳、データベースの作成)。
2. 未入手文献の入手。

この目的に沿って平成11年度に得られた成果は以下の如くである。

1. 従来明らかになっている主要文献の整理。チベット蔵外文献については、特に研究代表者御牧の分野研究の一つである宗義文献研究について、平成11年度は初期宗義文献(前期仏教伝播期の8, 9世紀の敦煌文書を中心とする)を集中的に扱って整理をほぼ終え、中期宗義文献(11世紀のRong zom Chos kyi bzang poのもの他)に着手を開始した。研究代表者御牧のもう一つの分野研究であるボン教研究については、14世紀のボン教教義文献『ボン門明示』(Bon sgo gsal byed)の批判的校訂本と翻訳を作成しつつ、特にボン教の世界観と仏教の世界観を比較してその影響関係を明らかにした。

2. 未入手文献の入手。 - - チベット大蔵経の版本、写本の内先ず従来設置が遅れていたプダク(Phu brag)カンギュル(マイクロフィッシュの形で出版)を購入した。また部分的にはあるが、オーストリア学士院とイタリア学士院の共同事業によって入手されたスピティのタボ寺の写本のコピー - を入手した。

平成11年度はフランス、パリへ海外出張しCNRSのチベット人Samten G. Karmay教授とボン教文献について共同研究を行うことが出来、有益であった。

---

## A01 チャガタイ・トルコ語、ペルシア語文献の諸写本研究

研究代表者 間野 英二  
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 真下 裕之  
京都大学人文科学研究所 助手

平成11年度研究成果

本年度は、間野が7月にロシアのサンクト・ペテルブ

ルグにおもむき、ロシア科学アカデミー東洋学研究所蔵のチャガタイ語写本を調査し、『パーブル・ナーマ』の写本2種、『ターリーヒ・ラシーディー』のチャガタイ語訳本写本3種、パーブルの『ムバイイン』写本1種の、計5種の写本のマイクロフィルムを入手した。これらは直ちに焼き付け、すでに一部をコンピュータに入力して研究に利用している。この研究の結果、サンクト・ペテルブルグの『パーブル・ナーマ』2写本が、先に間野が『パーブル・ナーマ』校訂本(1995年刊行)作成の際に利用した諸写本とは、かなり性格を異にする特異な性格のものであることが明白となった。この点については、11月に京大会館で開かれた原典班研究集会の席上、「チャガタイ語、ペルシア語写本に関わる今年度の研究状況について」と題する研究発表で報告した。また『ターリーヒ・ラシーディー』のチャガタイ語訳本は3種とも訳者を異にする興味深い作品で、現在、鋭意その内容を検討中である。

一方、真下は11月にイギリスのロンドンとオックスフォードにおもむき、大英図書館、王立アジア協会、ボードリアン図書館において主にペルシア語文献を調査し、『パードシャーフ・ナーマ』『グルシャネ・イブラーヒーミー』など、ムガル朝関係を中心とするペルシア語本19種のマイクロフィルムを入手し、現在、その内容を検討中である。真下は、これらの他に、『サングラーフ』と呼ばれる18世紀のイランで作成されたチャガタイ語・ペルシア語辞典の写本2種のマイクロフィルムをも将来した。これらの2写本は、現在、間野を中心に、かつてG.クローソンが出版したギブ記念財団所蔵の1写本のファクシミリ本とも対照しつつ、コンピュータを利用した校訂本作成へ向けての下準備を進めている段階である。

---

## A01 西洋近代哲学と中国古典

研究代表者 堀池 信夫  
筑波大学哲学・思想学系 教授

本年度の研究は18~19世紀にかけての西洋の哲学者における中国哲学の受容解釈である。本研究は同時期の西洋の哲学者の中国哲学受容についての全面調査を本来の目的とするが、本年度はおもにヘーゲルを対象を絞り、その受容における依拠資料の研究と、ヘーゲル哲学の中での中国哲学の反映の研究という両方向において課題を追求した。

まず、ヘーゲルが中国哲学を受容する際に依拠した資

料については『メモワール・ド・シノワ』にねらいを定め、そこに所収された論文をデータベース化して今後の検索・参照の便に備えた。あわせて同所収の論文のいくつかについてはヘーゲルが依拠した点を検出し、それに基づいて以下のような方向で検討を進めた。

ヘーゲルの哲学における中国哲学の位置づけに関しては、『宗教哲学講義』『哲学史講義』『歴史哲学講義』を主要資料とし、とくにヘーゲルの『老子』の思想の解釈について検討を行った。ヘーゲルは『老子』の「無」について、それを根源的であり無規定なものとすることにより、前哲学的なもの、哲学的思弁の対象以前のものであり、高次の概念とはいえぬものと位置づけた。そして最東方にある中国の思想的発展のレベルは、それより西側地域の文化よりも低いものと見定め、西に向かうにしたがって思想の発展は高次になってゆくとした。ヘーゲルについての研究は引き続き、儒教の問題ともからめつつ展開しつつある。一方『老子』哲学の解釈についてはヘーゲル以後の解釈も射程に入ってくるようになり、20世紀の哲学者への影響も問題となってきている。したがって今後この方向に研究が展開する可能性も大きい。

本研究に関しては、その一部について平成11年11月13日、京大会館における原典班の研究会において、「ヘーゲルと『老子』」というタイトルで口頭発表を行った。

---

## A01 チベット蔵外文献学説綱要書の視座より見たインド古典諸論書の思想の文献学的研究

研究代表者 森山 清徹  
佛教大学文学部 教授

ツォンカパ(1357-1419)は『菩提道次第小論』『中観意趣善明』で二諦すなわち世俗諦と勝義諦の区分を二諦は同一の自性を有するが、排除による区別あるものと結論付ける。それは唯識派から中観派の自立派、帰謬派に共通するすなわちインド大乘仏教の論理である。ツォンカパは、それを二方法により導く。

1. 論理による方法としてカマラシーラ(c.740-797)の『中観光明論』に表明されるアポーハ論に基づいている。
2. 聖教による方法としてカマラシーラの『中観光明論』に引用される『解深密経』の見解から二諦は同一でも別でもないと導く。

このことは、ツォンカパ以下ケドツプジェ(1385-1438)、ジャンヤンシェーパ(1648-1721)、ガクワンパ

デン(1797?)、ダライラマ14世に至るチベット仏教ゲールク派の伝統であることが彼らの著作の上から確認され得る。そのさらなる背景は、1.2.共にカマラシーラの論述が事実上の原点となっている。1.そのアポーハ論は、カマラシーラ自身がダルマキールティ(c.600-660)のアポーハ論に依っている。それは、ガクワンパルデンの『量評釈』第一章k.40-42への言及からより明白となる。1.2.共に典拠となる経論に対する評価が中観派内でも自立派と帰謬派とは異なる。特に2.『解深密経』の論述を自立派は無自性、勝義を説く了義とするに対し、帰謬派は帰謬すなわち自性が別、排除が同一と仮定した場合に導かれる矛盾の指摘であり未了義と解釈する。この点が帰謬派を最重視するツォンカパ以下のゲールク派の伝統を表わし、むしろ2.による結論を『解深密経』よりも『般若経』やナーガールジュナ(c.150-250)の見解から導こうとしている。しかし、このことがかえって自立派カマラシーラの『中観光明論』が、その事実上の典拠としてゲールク派の伝統の中でいかに影響力を持ったかを、より明白に示している。

---

## A01 スコイエン・コレクションのアフガニスタン出土仏教写本の研究

研究代表者 松田 和信  
佛教大学付置研究所 教授

本研究は、ノルウェーの写本蒐集家マーティン・スコイエン氏の蒐集したアフガニスタン出土仏教写本(スコイエン・コレクション)を調査し、それらに対する解読研究を行うことを目的としている。コレクションに含まれる写本類は、破片を含めて、全体で約1万点以上にのぼるが、本年度はオスロにおける現地調査を行い、ほぼすべての写本断簡のカラー複写を入手した。本年度はこれらの写真を用いて断簡類を書体、内容別に分類して同定作業を行い、それと平行してローマ字転写テキストを順次コンピュータに入力した。それによると、コレクションには、破片を除いて、カローシュティー文字写本(200点)、クシャーナ文字写本(240点)、グプタ文字写本(1000点)、ギルギット・パーミヤン第1型文字写本(550点)、同第2型文字写本(110点)が含まれていることが判明した。これらの中から、本年度に解読の完了した文献は『勝鬘経』および『新歳経』の断簡である。なお平成11年8月末にスイスのローザンヌで開催された国際仏教学会において本コレクションを研究しているヨ

ヨーロッパの研究者数名と共にコレクションの概要について研究発表を行ったことを付け加えておきたい。

## A01 中央ユーラシア地域に伝播した仏典の研究

- 研究代表者 吉田 豊  
神戸市外国語大学外国語学部 教授
- 研究分担者 影山 悦子  
神戸市外国語大学外国語学部研究員
- 研究分担者 松山 節  
京大大学生態学研究センター研究員
- 研究分担者 松井 太  
大阪大学文学部研究員

初年度は、中央ユーラシア地域に広く伝播し、多言語で伝存している仏教文献『ヴェッサンタラ・ジャータカ』のテキスト蒐集と訳注の作成、及びテキストの電子化を行なった。

仏陀の本生譚のなかでも最も有名で人口に膾炙している『ヴェッサンタラ・ジャータカ』には、パーリ、サンスクリット、漢文はもちろんのこと、ソグド、トカラ、コータン、ウイグル、チベット、モンゴル（モンゴル文語・オイラート方言）の各言語テキストが伝存しており、各言語テキストの当該言語文化圏における伝承形態とともに、この物語が各文化圏を跨いで伝承されていく過程を位置付けるための格好の資料である。

本年度は、従来、あまり研究されてこなかったモンゴル語テキストを蒐集するために、研究分担者の松井がロシア科学アカデミー東洋学研究所サクトペテルブルク支部を訪れ、テキスト及び関連資料の調査を行なった。また、大阪外国語大学大学院の山口周子が中国・内蒙古図書館から将来した北京版モンゴル大蔵経論説部所収のモンゴル語テキストについて、訳注作業を開始した。因みに、このテキストは、従来知られているモンゴル語テキストとはまったく系統の異なるものであり、非常に価値が高い。

## A02 「本文批評と解釈」

### A02 旧約聖書の本文批評と解釈 その方法論的反省から翻訳の実例まで

研究代表者 関根 清三  
東京大学院大学人文社会系研究科 教授

本計画研究の目的は主として3つあった。

- (1) 古典のテキストの読解の理論と技法の実際について、古典学の諸分野との共同研究から学びつつ、旧約聖書学の場合について整理反省すること。これはシンポジウムや研究会で進めつつあり、就中ニューズレター5号に掲載した上山春平氏とのイスラエル学をめぐる対談にその成果が発表されている。
- (2) 解釈の歴史的意味規定と思想的意味規定の望ましいバランスについての理論を模索し、旧約解釈の場合に実際に適用する研究の成果は、二つの編著『死生観と生命倫理』『性と結婚』に纏めて発表した。
- (3) そうした解釈学的な吟味を踏まえて更に、具体的な翻訳の方法論と実践例を呈示することは、岩波書店から刊行予定の『エレミヤ書』の翻訳で現在進めつつある。今年度は、Glossaryのデータベース化等基礎作業を終え、約三分の一を訳し終えたところである。

### A02 古典としての古典学 宋学文献を中心に

研究代表者 土田健次郎  
早稲田大学文学部 教授

『朱子語類』は、朱熹の肉声を伝える口語文献であるが、文語で書かれた文献とともに朱子学の体系を知るうえで必読の古典として定着していった。また朱子学系統の註釈類には朱熹の経注の理解を助けるために語録が多量に引用され、古典学としての朱子学を補助する働きも担っていた。本年度はこの『朱子語類』がはらむ諸問題の多角的検討に着手した。現在最も利用されているのは黎靖徳の『朱子語類大全』140巻であるが、それと別系統の語類である葉士龍『晦庵先生語録類要』や楊与立『朱子語略』も現存している。まず楊与立の語録については内閣文庫所蔵のテキストの焼き付けを入手、呂柟『宋四子抄釈』中の『朱子抄釈』がこの語録の節録であることから、両者の比較を行った。その結果、内閣文庫本が前半のみのテキストであることが判明した。これら二つの